

入学式告辞

今日、晴れて入学の日を迎えられた皆さんに、名古屋外国語大学を代表して心からお祝いを申し上げます。また、今日、本学にお越しくださいました保護者の皆さまにも改めて心より御礼申し上げます。

今日から皆さんの新しい学び舎となる名古屋外国語大学は、昨年度、創立三十年の記念すべき年を迎え、すばらしい高揚のうちに一年を閉じることができました。私たちの大学は、今まさに長い成長期を終え、本格的な「自立」の時代に入ったといえます。そしてその自立の証として、数日前に発表された世界大学フロンティアの日本版では、約七七〇ある国公私立大学のなかで総合部門第七十四位という輝かしい成績を収めることができました。

また、この四月一日をもって、私たちの大学には、四番目の学部、世界教養学部が加わりました。そこで私は今日、「世界教養(World Liberal Arts)」という言葉のもつ意味について、そして「人生百年」といわれる時代に生きる上での「教養」の大切さについてお話したいと思います。最初に確かめておきたいのは、「世界教養」とは、たんに一学部一学科の名称に留まらず、広く、私たちの大学全体における「教養教育」の総称だということです。一年次と二年次においては、「外国語」と「教養」の学びが主な柱となりますが、後者の「教養」の学びの要となるのが、「世界教養プログラム」と呼ばれる一連の授業科目です。他方、専門とは、皆さんが、主として三年次以降に身につける専門的な知識の体系を意味しています。たとえば、フランス語学科の学生であれば、フランスの文化や芸術について、あるいは、EJ圏の政治経済を深く追究していくことでしょうか。また、世界共生学科の学生であれば、「発展途上国におけるデモクラシー」、多文化共生のなかに生きる人々の心の問題などを取り上げるかもしれません。

それに対して「教養」とは、一般に、ひとりの人間が、ひとりの自立した人間として持つべき、様々な分野にわたる知識のことをいいます。そこには、もちろん、人類が長い歴史のなかで生み出した文学や芸術など質の高い文化に関わる理解も含まれています。そうして、教養と専門のバランスのとれた知識の修得をとおして、人間の人格、物事に対する判断力や創造力が養われるとされるわけですね。

では、なぜ、「世界教養」なのでしょう。私の答えは端的にこうです。「世界教養」とは、この不確実性に満ちた現代を生きていくなかで、正しい情報収集能力と的確な判断力、さらに豊かな共感力をもって、世界の人々と繋がって生きるための知識であり技術、すなわちアーツなのだ、と。いわゆる一般的な教養と異なり、「世界教養」の考え方においては、世界のさまざまな地域に生きる人々や文化への関心と共感力が基盤となります。

しかし人間は、むろん、「教養」ないし、今、私がいう「世界教養」なしでも生きることができません。「人はパンのみにて生きるにあらず」とは福音書の言葉ですが、日々、飢えに苦しむ人々にとつて、目の前のパン以外、何かしらリアルで切迫した意味を持つことはありません。逆に、今こうして「教養」の意味を問うことができる私たち自身、幸せな存在といわなくてはならないのです。しかし、「教養」は、けつしてなくて済むというものではありません。また、知的アクセサリーでも、知的贅沢品でもありません。むしろ、私たち一人ひとりにとつての知的必需品といったほうがよいのです。

デイヴィッド・チャーマーズという哲学者が述べた有名な言葉があります。「 아이폰はすでに私たちの心の一部になつて了る」(“The iPhone is part of my mind already.”) いえ、もはや心の一部どころではありません。スマートフォンへの依存は、想像以上に強まり、この十センチ四方の「ポケットサイズの神さま」が、私たちの心を支配するばかりか、支配された私たち人間を、知らぬまに、おごり高ぶつた存在に育て上げている。かりにスマートフォンが私たちの心の一部であるならば、その一部を、自分たちの英知でもつてしっかり管理する術を学ばなくてはなりません。たとえば、電車のなかでスマートフォンに熱中する若い人々の姿を見ながら、私はふと不吉な不安にかられることがあるのです。

ご存知のように、私たちの生活にとつて最大の関心事の一つが、AIです。多くの人が予測しているように、AIの進化は、確実に私たちから日々の労働を奪っていくでしょう。つまり、私たちは、遠くからず、すさまじく長い空き時間、自由時間のなかで生きざるをえなくなるということです。スマートフォンでゲームに熱中する人々の姿に不安にかられると述べた理由がまさにそこにあります。他方、AIや先端医学の発達によって人間の生命はどんどん延びていく。二〇六〇年には、女性の平均寿命は、九十一歳、現在の平均寿命とされる女性の八十七歳の平均余命は七歳ですから、現実的に「人生百年」時代は到来しているといっても過言ではありません。まさにこの「百年を豊かに生きるか、貧しく生きるかは、私たち一人ひとりの心がけ一つにかかっているのです。そこで私たちは、できるだけ早い段階で、できるだけ豊かに生きられる技術を、すなわちアーツを手にしておく必要があるのです。

皆さんは、「多芸は無芸」という諺をご存知でしょうか。英語では、“Jack of all trades and master of none.”と表現されます。一見、多くの芸や学問に通じていると思われる人は、一つのことを奥深く究めることをしないで、すべて中途半端に終わる、結局は「無芸」に等しい、「器用貧乏」という意味ですね。しかしこの諺、たしかに、私が生まれた七十年前、すなわち「人生六十年」の時代であれば、通用した諺かもしれません。しかし「人生百年」と呼ばれる今の時代には、むしろ「多芸」こそが追求されてしかるべきだと私は考えるのです。一年ほど前、本学同窓会の招きで、お笑いタレントの厚切りジェイソンさんが講演したことがありました。彼の持論に接し、私はとても新鮮な感動を覚えました。ジェイソンさんは、聞き手に向かって、一人に一人の人間になるにはどうするか、と問いかけました。答えは、十人に一人しかできないことを四つ身につければよい、というものです。たしかに、十分の一を四回掛け合わせると、一万分の一になります。ですが、私は、皆さんにもうすこし欲張つてほしいと思う。ぜひとも、十万人に一人の人間になる努力をしてほしい。そのためには、どうするか。十分の一をさらにもう一回掛け合わせ、この手のひらの五本指の数と同じにする。すると、たちどころに、十万人に一人が誕生します。「多芸は無芸」に對抗し、私は、あえて新たな諺を皆さんにプレゼントしようと思うのです。“Jack of all trades”の代わりに、“Jack of five trades.” “master of none.” は、やはりただだけませんで、一つだけ、だれにも負けない何かをしっかりと手に入れ、長い年月をかけて磨いていきましょう。そこで、“none”の代わりに“one”を当てはめてみる。“Jack of five trades and master of one.”

とにかく、挑戦しなければなりません。挑戦のためのヒントとなるのが、じつは「世界教養」における学びなのです。 「世界教養」は、five trades を探り当てる宝箱といつてもよいかもしれません。七十二用意された授業科目のなかから、できるだけ人には惑わされず、現在の自分、理想とする自分をしっかりとみずえながら、宝くじのように可能性の糸を手繰りよせてほしい。むろん、サークル活動も五本指の一つとなりうる可能性があります。そしていずれにせよ、選ばれた五つの「trades」(トレード)が、まさに皆さん一人ひとりの個性となり、十年後、いや、早ければ四年後に、十万人に一人の人間になることを可能にしてくれるのです。

さて、私たち名古屋外国語大学のキャンパスは、日進の小高い丘の上に立っています。お隣では、私たちの姉妹校である名古屋学芸大学の学生たちが学んでいます。今日から四年間、NUFS(名古屋外国語大学)のみならず、お隣のNUAS(名古屋学芸大学)の学生たちとも切磋琢磨し合いながら、充実した学生生活を送つてほしいと願っています。

そして最後に胸に刻んでおいてほしいことが一つ。今日から、名古屋外国語大学は、皆さんの人生にとつて、かけがえのない伴侶となるということ。皆さんのこれからの努力と将来における活躍によつて、私たちの大学それ自体の輝きと未来もまた、日々、更新されるといふこと、私たち教職員一同も、そのことを胸に刻みつつ、皆さんのよりよき学生生活のために全力を尽くす所存です。以上をもって、学長の告辞といたします。

二〇一九年四月一日

名古屋外国語大学長 亀山 郁夫